

“うごきの比較学” にむけて

——惑星社会の“臨場・臨床の智”への社会学的探求 (1)——

新 原 道 信

Toward an “Comparatology” of Nascent Moments: Sociological Explorations on the “Living knowledge (cumscientia ex klinikós)” for the Planetary Society (1)

NIIHARA Michinobu

This article evolved from a research project called “Sociological Explorations on the “Living knowledge (cumscientia ex klinikós)” for the Planetary Society” which is a part of the European Research Network’s activities at the Institute of Social Sciences, Chuo University. The project is based on the idea that exploring, against the tide of the disposition to dissociate/disengage oneself from what is happening, “Region and Community for Sustainable Ways of Being” is urgent and crucial for the 21st century planetary society, in which the multiple problems concerning exclusion and inclusion are increasingly frequent. Throughout the project, we have sought to clarify the ways in which “Living knowledge (cumscientia ex klinikós)” is lived or embodied in so-called “frontier/liminal territories” in which the varieties of “homines patientes” try to coexist while conflicting, merging, and intertwining with one another. Under such objectives, I conducted research in certain areas, regarding the autonomy and independence of such localities, the global inter-cooperation among the communities, and the composite/complex/hybrid identities of the community residents, while employing such key concepts as “imagination and creativity of limit-situation.” The article reflects on the epistemology developed from dialogue with Alberto Melucci, Alberto Merler, Andrea Vargiu, Anna Fabbrini-Melucci. My research experience of encountering the “wise on the frontier/liminal territories” and being involved in the “crude reality” submits a theoretical framework for conceiving and coping with the ongoing problems. In that, the article sets out a preliminary exploration for what might be called “Comparatology” of nascent moments.

キーワード：惑星社会, 境界領域, 臨場・臨床の智, うごきの場, 居合わせる, 比較, 地域コミュニティ, フィールドワーク, リフレクシヴ, メルッチ, メルレル

特定の地域の文化の現場について、経験的な問いを発すること（誰が、何を、いつ、どこで、どのように、なぜ）であって、現場検証から一般原則を導き出す作業を避け、拒絶するのに、あえて理論家を気どる必要もない。私たちに必要なのは、背後に横たわる大きなプロセスや縦横のネットワークを分析し、自分がおこなったケース・スタディに意味づけをすることである。グロスバークも言うように、私たちは、人と場所に応じて様々に異なるグローバリゼーションの構造と実態を語れなければならない。むろんだからといって、一部のマルクス主義者が懸念するように、グローバルに放射された地域個別主義に目を奪われて、全地球的な力やシステムを忘れてよいのではない。関係性は単純でない、と言っているのであって、それがどのように錯綜しているかを理解しなければならないのだ。（Meaghan Morris, “Globalisation and its Discontents” presented to the Conference of the *Globalisation Australia*, 1999 = 「グローバリゼーションとその不満」『世界』2001年4月号, 270-271ページ）

1 はじめに——“臨場・臨床の智”という「もののみかた／うごき」について

本稿は、中央大学社会科学研究所のヨーロッパ研究ネットワークを母体として着手された共同研究チームである「3.11以降の惑星社会」（2013～2015年度）と、「惑星社会と臨場・臨床の智」（2016～2018年度）の研究活動に基づいている。新たな研究チームのキーコンセプトとなっている“臨場・臨床の智（cumscientia ex klinikós, living knowledge）¹⁾は、これまでのイタリアの共同研究者との間の”対話的なエラボレイション（co-elaboration, coelaborazione, elaborazione dialogante）”によって創りあげられてきたものである。

“臨場・臨床（klinikós）”とは、「理論／実践」、「ものごとをみる力／実際にうごくことでものごとを変える力」という枠組みとは異なるアプローチによる現実理解の在り方、すなわち、生身の現実に巻き込まれ、引き込まれていく在り方（ways of being involved in the crude reality）である。本研究チームは、“臨場・臨床の智”という「もののみかた／うごきかた」を通奏低音として、下記の試みをすすめていく。

- (1) 本研究チームは、イタリアの社会学者A.メルッチ（Alberto Melucci）の惑星社会論、そして、A.メルレル（Alberto Merler）の社会文化的な島嶼社会論を現代社会認識の基点とする。
- (2) 研究テーマとなるのは、“惑星社会（società planetaria, planetary society）”の“限界状況（limit-situation）”で萌芽しつつある“臨場・臨床の智（living knowledge）”はいかなるものか、それはいかにして把握し得るのか、である。
- (3) “臨場・臨床の智”をとらえるために、日本とイタリアの研究者の協力により、“地域社

会／地域／地（region and community/field/terra）²⁾において生起する関係性の動態，その構造とメカニズムに焦点を合わせ，“境界領域のフィールドワーク（Fieldwork on “the frontier/liminal territories”）”を中心とする調査研究をすすめてきた³⁾．その研究活動のなかで，“リフレクシヴな調査研究（Reflexive research, Ricerca riflessiva）”⁴⁾の〈エピステモロジー／メソドロジー／メソツズ〉を錬磨している．

(4)本稿は、「3.11以降の惑星社会の諸問題に応答する」ことを目的として，“複数の目で見て複数の声を聴き，複数のやり方で書いていく”かたちですすめてきた一連の論考の流れのなかに位置づけられるものである⁵⁾．本稿においては，この試みとして集団・集合的，協働的になされてきた”リフレクシヴな調査研究”の到達点として意識されている，“うごきの比較学（“Comparatology” of nascent moments）”の現段階についてのとりまとめを行いたい．

(5)そのために，本稿で提起するに至った“うごきの比較学”の“背景（roots and routes）”となっている根源的な課題（2節），国民社会を準拠枠とした社会科学を相対化する試み（3節），都市・地域社会学的なフィールドワークの試み（4節），“うごきの場”という「フィールド」設定および「居合わせる」という方法（5節），そこから求められた比較学（6節），今後の課題（7節）についての確認を行う．

2 “（「問題解決」だけではない）新たな問い”という根源的な課題

本研究チームは，A.メルッチが提唱する「惑星社会（planetary society）」論を現代社会認識の基点とし，そこに生ずる社会問題に応答することをめざしている．惑星社会論は，システム化・ネットワーク化の可能性に注目するグローバル社会論に対して，自然や資源の有限性，極度にシステム化した社会の統治性の限界に着目する現代社会論であり，同時代認識である⁶⁾．研究チーム「3.11以降の惑星社会」（2013～2015年度）においても，惑星社会の特徴であるところの，〈「社会的行為のためのグローバルなフィールド」の「広がり」と同時に，「その物理的な限界」がもたらす複合的問題の「深まり」〉というアンビヴァレンス（ambivalence）から「3.11以降」⁷⁾を考察してきた．

この観点から見た場合，日本社会とそこに生きる私たちの「状況・条件」は，「震災，津波，原発事故」で変わってしまったのではない．多重で多層かつ多面的な問題は，「3.11以前」にも“未発の状態（stato nascente, nascent state）”で客観的現実のなかにすでに存在し，「3.11」はその問題が顕在化する契機となったに過ぎない．ごくふつうの生活者が，実にはたやすく，ある日突然，“受難者／受難民（homines patientes）”となる．「病者」とされ，戦場となり，汚染された土地からの強制退去者となり，放射能汚染に曝される．

にもかかわらず，（研究者も含めた）個々人の「条件」としては，全景を見ることは難しく，

想像力の限界にふれるような問題である“惑星社会の諸問題”が発生するメカニズムを把握することは、きわめて困難なものとなっている。調査研究をする側は、“未発の状態 (stato nascente, nascent state)”で伏流している問題を根本的にとらえなおすための理論・調査法がいかなるものか、潜在的な“受難者／受難民”でもある「惑星社会の住民」との間でいかなる関係性を取り結んでいくのか——すべての「問い」において新たな組成が求められている。

根本的な変化が始まる場所である“未発の状態”にある社会文化的プロセスをとらえる社会学を、いかに再構成していくのか、〈顕在化し可視的なものとしてとらえ得る「出来事」の水面下に潜在しつつ流動し変化し蓄積されている状態とその社会文化的プロセス〉という、測定あるいは把握の困難・限界を抱える対象に対して、[理解を]始める (beginning to) ためには、異なる境界線の引き方、補助線の引き方を提示することでメタモルフォーゼを誘発する必要がある。

メルッチは、「予め答えが含まれているような問題解決 (problem-solving)」だけでなく、「新たな問いを立てること (formulating new question)」,そして、「問いのレベルにおけるフィールドを常に再構築すること (restructuring of the field at the level of interrogation)」が現在最も求められていることだとしている⁸⁾。ここで-ing形で示される「新たな問い」は、「解決 (solution)」への道筋が「予め含まれている」ものではない。むしろ、枠組みそのものへの「問い」を発することによって、既存の「問題解決」のフィールドを一度は突き崩し再構造化することを求める。しかもそのやり方は、メタレベルのコミュニケーションという「(深層からの) 問いかけ」,すなわち思考の枠組みを異とする他者との「間で (inter)」問いを発する (rogare) という不協の多声 (polifonia disfonica) の構造を持っている。手元に蓄積された知恵 (sapienza) や智恵 (sapere) を尊重しつつも、これまでの「知」の枠組みを一度は手放すことを恐れないこと、「人文的／人間的な素人 (humanistic amateur)」⁹⁾として、“(「問題解決」だけではない) 新たな問い”を発することが、「3.11以降」の焦眉の根源的な課題となった。

3 国民社会を準拠枠とした社会科学を組み替える試み——M. クーン, 矢澤修次郎, J. ガルトゥングの問題提起

新たな社会科学への試みに着手しているM.クーン (Michael Kuhn) と矢澤修次郎は、Beyond the Social Scienceというシリーズを近年刊行し、その第1巻として、国民国家の枠組みにとらえられた社会科学の乗り越えをめざす編著書をまとめた (Michael Kuhn and Shujiro Yazawa (eds.), *Theories About and Strategies Against Hegemonic Social Sciences*, Stuttgart: Ibidem-Verlag, 2015)。さらに、第2巻として刊行した「科学的思考」への批判的考察をまとめた著作 (Michael Kuhn, *How the Social Sciences Think about the World's Social*, Stuttgart: Ibidem-Verlag, 2016) に基づき、2016年11月9日、中央大学社会科学研究所において、クーン

教授と矢澤教授を招き、公開研究会「科学的思考に対する社会科学的方法（The Social Science Approach to Scientific Thinking）」を行った¹⁰⁾。

今日のグローバル社会の構造と動態，そこから生じる諸問題は必ずしも「明晰」「判明」ではなく，惑星規模のグローバル社会そのものをとらえるための社会科学の革新が必要とされている。矢澤修次郎は，この認識について，2013年2月26日の成城大学グローバル研究所での報告「グローバル研究の可能性——社会学の立場から」で，すでに展開している。

矢澤によれば，これまで社会の概念は，「地域」（というメタファー）にクリアな境界線を引くことによって成り立ってきた。「国際化」「グローバル化」といった言葉によって，社会の認識を責務とする研究者がとらえようとしてきた現象は何だったのか。「国際社会学」の含意は，可視的な外交制度等に着目する国際関係の社会学（「国際・社会学」），海外の具体的な地域を研究する海外の地域研究の社会学（「国際地域研究」）であった。しかしながら，見ることも想像することも困難な「国際社会」そのものに関する「学」は十分ではなかった。新たな，いままでにない現実をとらえる理論，概念（新たな名前，言葉，コード），カテゴリーが必要である。社会学者は，経験的リアリズム（自らの「知覚」のみがリアルだとする実証主義）か，観念・概念こそがリアルだとする超越論的観念論にしばられている。「事象に底在する構造とそのメカニズム」こそがリアルなものと考え，この「超越論的リアリズム」によって，「世界社会（world society）」「グローバル社会（global society）」「惑星社会（planetary society）」——「想像したり把握したりすることが困難な社会的世界」というまとまりを仮定する。「その存在を，そのまま知覚することはできないが，確証することはできるはずだ」と述べている¹¹⁾。

クーンと矢澤によって提起された「知的様式（intellectual style）」をめぐる問題は，すでに，1980年代から，平和研究者J. ガルトゥング（Johan Galtung）によって，以下のようなかたちで整理されている¹²⁾。

①中心と辺境という空間概念，②進歩や成長の概念（時間概念），③知識の概念化（複雑な問題を操作可能な単位にまで「X-Y関係」に還元し，演繹関係に基づく知的ピラミッド造り），④人間と自然との関係における人間中心主義，⑤白人・男性の優越，垂直的統治，⑥普遍的かつ排他的な存在，唯一の中心といったコスモロジーが存在している。すなわち，「成長の観念」「知識体系化の方法」「自然との関係を組み立てていくやり方」（the idea of growth, the way we organize our knowledge, the way we organize our relation to Nature）や「他の民族，他の性，他の年齢集団との関係を組み立てていくやり方」（the way we organize relations to other peoples, to the other sex, to other age-groups）と，西欧的宗教への信条との間には，「内的一貫性（an inner consistency）」が存在している。

こうした「超越論的」レベルからの指摘に耳を傾けることで，「本来向き合うべき根源的な問題」の存在に気付かされる。すなわち，新たな“智”の在り方を構想する調査研究者もまた，

既存の「社会認識の枠組み」に強く拘束されているという問題である。長年にわたって、不可視の「文化の構造」を考察してきた文化人類学者R. マーフィー (Robert Murphy) が、神経難病という自らの「限界状況 (Grenzsituation, limit-situation)」に臨んで発した下記の言葉は、「3.11以降」を生きる調査研究者の指標とならざるを得ない。

「文化における象徴の意味を人間の社会的表現から切り離して理解することも、逆に行動を象徴的表現から切り離して考えることも不可能である」。なぜなら「我々人間は雲の中に頭だけはつっこんでいるかもしれないが、他の部分は糞まみれ (Though we humans may have our heads in the clouds, the rest of us is embedded in dung)」だからだ (Robert F. Murphy, *The Body Silent*, New York, London: W. W. Norton, 1990[1987]年 = 辻信一訳『ボディ・サイレント——病いと障害の人類学』新宿書房, 1992年, 215ページ)。

理論と方法論の構築、実際の実証研究のなかで、どのように「雲の中」の頭と「糞まみれ」の身体をつなかりを自覚し、その関係性を組み替えていくのかという「創造的プロセス (the creative process, il processo creativo)」の問題が浮上してくる。「存在」と「認識」をめぐる「問いかけ」は、同時に、社会的生活者としての私たちの「生活」、さらには「生存の在り方 (ways of being)」への「問いかけ」と不可分である。この点については、惑星社会のもとでの地域社会の実証研究として何を成し得るのかという「問い」に即して考えていきたい。

4 日本の都市・地域社会研究者の試み

地域社会・コミュニティにおけるフィールドワークを“メチエ (職務, 誓願, 使命: *métier, professione, Beruf*)”とする日本の都市・地域社会研究者にとって、1995年の「阪神・淡路大震災」と2011年の「東日本大震災」は、自らの理論と方法を根本的に問い直さざるを得ない「岐路」となった。

地域社会学会の25周年を記念して出版された、地域社会学会編『キーワード地域社会学』(ハーベスト社, 2000年)の「序文」のなかで、古城利明は、「『常識』と考えられていたものが、突然の断絶にさらされたとき、われわれはそこに『隠されていたもの』をみいだすことがある」と述べた。そして、「『隠されたもの』という比喩は、『もの』の本質といったことではない。それは普段『常識』という衣のなかにくるまれていて自覚されないもの、しかし『常識』のなかで重要な働きをしているものという意味である」(同書, 1ページ)として、構造の本質が安定的に存在しているという(調査研究者にとっての)「常識」の見方より、構造そのものが流動化しまた再構造化していく「変化の道行き」に着目する視点を提示した。

「突然の断絶」によって、確かであるつもりだった「制度」に混沌がもたらされ、そこからまたなんらかの秩序あるいは別の混沌へと移行していくという変化 (passage) のなかで起きていることを、個々の小さな事実、場合によっては、特定の個人から発せられる自然言語・

生活言語、さらには、個々人の心意現象にまで降りていって検証し、どちらにすすむのかいまだわからない“未発の状態”から、別の状態へと移行（*passage*）する多系／多茎の可能性（*le vie possibili verso i vari sistemi*）を明らかにする実証的な社会学が求められたのである。

「1.17」そして「3.11」以降，“臨場・臨床”の場に臨んだ調査者たちは、被災した「ごくふつう」の都市・地域住民たちの個々のミクロな相互作業によって、新たな状態、新たな制度がつくられていく過程（「変化の道行き」）を目のあたりにした。そこで出会っていたのは、「これからは、わが身もまた、突然に，“受難者／受難民（*homines patientes*）”へと変転させられていくのではないか、『突然の厄災』を体験し続ける／ふたたび体験するのではないか」という「予感」であった。

すなわち，“未発”であったはずのことがらが突然に顕在化し、日常性がこわれ，“見知らぬ明日（*unfathomed future, domani sconosciuto*）”がやって来るという感覚、地域生活のなかで「日常性」と「事件」とが対比的に併存しているという「知覚」である。しかしこの、個々人の“心身／身心現象（*fenomeno dell'oscurità antropologica*）”のレベルまで深化させつつ生起している関係性の“移行、移動、横断、航海、推移、変転、変化、移ろいの道行き・道程（*passaggio*）”の重要性に気付いたとして、いかにして、その関係性の動態を把握するのかという理論・方法論上の問題は、「先送り」されたままであった。

こうした自覚のもと、地域社会学会の30周年記念事業として出版された『地域社会学講座』全3巻の第2巻『グローバリゼーション／ポスト・モダンと地域社会』（古城利明監修，新原道信・広田康生責任編集，浅野慎一・橋本和孝・吉原直樹編，東信堂，2006年）において，監修者・編者たちは，以下のような理解をしていた。

本巻は、「移動」と「場所」に焦点をあて、グローバリゼーション／ポスト・モダンのせめぎあいの場所として地域社会をとらえなおし、地域社会個々の場で現象し生起しつつある諸問題（福祉・環境・ジェンダー・産業とその変容など）を、地球／世界規模での全景把握、日本社会の文脈での総体把握、さらに地域社会のレベルでの実態把握へとつなげておこなうことを試みてきた。まず“鳥の眼”から、冷戦構造以後のグローバリゼーション／ポスト・モダンの展開と地域社会の関係についての全景把握を試み、「移動」とそれぞれの地域社会への定着、共生、結合の諸過程を考察し、さらには“虫の眼”から、グローバリゼーション／ポスト・モダンのせめぎあいの「場所」として地域社会をとらえなおし、地域社会の多様なレベルでの破壊と再生の実態把握を試みた諸論考を配置してきた。文体や抽象度の違いはあれども、各自が地域社会研究者として日常的に培ってきたケース・スタディに基づいての対比・対話であり、日頃の研究での立ち位置から境界をこえての、*playing & challenging*な移動の試みでもあったのだが、さらに新たな試みへの端緒でもあ

る第Ⅳ部においては、「鳥の眼」から「虫の眼」へと至る世界／日本／地域社会把握の試みをふりかえりつつ、グローバリゼーション／ポスト・モダンのせめぎあいの場において、いかなる形で地域社会は再生し、新たな公共性が創られていくかを模索することを試みる。（以上、新原が執筆した「第Ⅳ部梗概」、209ページより）

本巻（第2巻）の課題は、第Ⅳ部の梗概でも述べたように、グローバリゼーション／ポスト・モダンのせめぎあいの場所として地域社会をとらえなおし、個々の場で現象し生起しつつある諸問題（福祉・環境・ジェンダー・産業とその変容など）を、地球／世界規模での全景把握、日本社会の文脈での総体把握、さらに地域社会のレベルでの実態把握へとつなげておこなうことにあった。しかし、本巻の編集作業にはかなりの困難が生じた。「困難」の中味は主に2つあったと思われる。

ひとつは、日頃から地域社会の個別的な現実に対面しつつけることを旨とする地域社会学者の方法と対象のズレ（多様性）の問題である。グローバリゼーション／ポスト・モダンという全地球のプロセスの進行にともない、地域社会は、「移動・変容・超越」等の問題に直面し、「地域」の有意味な単位をうまく確定できなくなり、他方で執筆者間のマクロトレンドへの共通理解は十分ではない。その結果、当初の「移動と場所」に焦点をあてた構成案に対して、「資本と情報」の問題を盛り込むべきではないかという意見が出され、これに付随して、執筆者が直面している地域社会の個々の局面に応じて、地域社会の破壊と再生の力点の置きどころに違いが生じた。

もうひとつは、Ⅰ部・Ⅳ部とⅡ部・Ⅲ部との抽象度の落差をどのように調整するかという困難であり、これは〈理論と実証〉、〈構造分析と経験的な場の理解〉という2足の草鞋をはいている地域社会学会に固有の問題であった。

こうした「困難」を念頭におきつつ編集作業をすすめる過程で、明らかになったことは、個々の地域社会研究者が、社会に埋め込まれているが故に生じる互いのズレを認めつつ、局所的に問題が発生している経験的な場に即して、いまいちど規範の問題にたちもどり、つねに形成されつつある構造を理解する試みを重ね、対比し対話することの重要性である。

それゆえ本書は、地域社会研究者が拘束されている個々の場において、様々に異なるグローバリゼーション／ポストモダンの構造と実態を視野に入れながら、小さく、いまだ十分に形をとらない現実に耳をすまし、自分が行っている地域社会研究を、その背後に横たわる大きな構造変動のプロセスや微視的な現象の双方と結びつけて意味付与するという「未完」で「挑戦的」な試み、ポリフォニックでディスフォニックな著書であることをめざした。（以上、新原が執筆した「あとがき」、247-248ページより）

同書の編集作業をすすめるなかで、古城利明、広田康生、浅野慎一たちと新原が議論したことは、以下のことがらだった。すなわち、グローバリゼーション／ポストモダンという「ズレ」や「緊張関係」をともなった運動のなかで、たしかに、「資本と情報」の移動は大きな力となっている。メルッチの言い方によるなら、「社会的行為のためのグローバルなフィールド」の「広がり」の力であるが、このなかで、社会構成体の様々なレベルを越境し移動していく個々人の身体的体験は、自らの、そして惑星地球そのものの「物理的な限界」と深く結びついている。そのひとつの現れとして、近年の“ひとの移動”の背後には、「逆転する植民現象」¹³⁾、すなわち、「植民・移民」は単に「過去」ではなく、モダンそのものが循環し、現在の構成要素となっている。その結果、グローバリゼーションは、地球規模で「国民」「市民」といった枠からはみ出す“受難者／受難民 (homines patientes)”の存在が可視化するプロセスとなる。気候変動、原子力、遺伝子操作、超高度化したテクノロジー、グローバル化した市場の「統治性の限界 (the limits of governmentality)」など、近代社会が生み出した「限界のないリスク」によって、「選択のジレンマ」を抱える「ごくふつうのひとびと」はたやすく“受難者／受難民”へと配置変えをしていく。この“心身／身心現象 (fenomeno dell'oscurità antropologica)”における内なる社会変動の意味と構造をとらえることが重要だという理解である。

これ以降、〈構造の分析と経験的な場の理解〉の双方に「2足の草鞋」を置こうとする都市・地域社会研究者は、それぞれのケース・スタディと理論・方法の錬磨の往還により、地域社会問題への応答を試みてきた¹⁴⁾。古城利明は、「総論・地域社会学の構成と展開 [新版]」地域社会学会編『キーワード地域社会学新版』(ハーベスト社, 2011年)において、2000年時点の「隠されていたもの」をめぐる自らの議論をふりかえり、メルレル、メルッチと新原が練成してきた“変化の道行き”と“個々人の内なる社会変動”に関する理論(「島嶼社会論」と“根(radice)”の理論など)について、日本の地域社会の「再生」を考えるとという文脈で下記のように言及している。

旧稿においては、「地域社会学の射程」を例示するために阪神・淡路大震災を題材に取り上げ、そこでは「隠されていたもの」という比喻を用いて、この射程の多面的なリアリティを示そうとした。……新原がA.メルレル(Merler, A.)に学びつかれと共有している「島嶼性 (l'insularità)」概念の三つの位相……に関する理論、この島嶼性の③ [「心意現象としての内なる島嶼 (l'insulità o l'isolità/l'iléité)」の位相を掘り下げた新原の「根 (radice)」に関する理論があることはふれておかねばなるまい。なぜならば、ここまで「変化の道行き」を探り当てる理論が深められていれば、「隠されていたもの」という漠然とした用語法は避けねばならないと考えるからである。(以上、同書、12-13ページ)

この指摘は、2011年5月に刊行された同書において、まだ「3.11」を体験していない時点で執筆されたものである。ここで古城は、「1.17」への理解を真摯に掘り下げ、地域社会学者の認識の枠組みを厳しく「再審」することを試みている。そしてさらに、「1.17以降」「3.11以前」という「大事件」の「間」、*「境界領域」*において提示された、*「社会文化的な島々 (isole socio-culturali)」*と*「根の流動性／重合性 (fluidità/compositezza delle radici umane)」*を基礎理論とする「*「境界領域」のフィールドワーク*」の可能性〉についての示唆は、「3.11」という“生存の在り方”を揺りうごかす体験を通して、さらにまた、「問いのレベルにおけるフィールド」が問い直されることとなった。

「3.11以降」の根源的な課題に答えるべく、私たちの研究チームは、「いままでにない現実をとらえる新たな理論、概念、カテゴリー」を構想するため、グローバル・イシューズが衝突・混交・混成・重合するローカルな「場所 (luogo, place)」である境界領域 (cumfinis) のフィールドワークをもとに、『*「境界領域」のフィールドワーク——惑星社会の諸問題に回答するために*』（新原道信編著、中央大学出版部、2014年）を刊行した。しかしながら、同書の終章において、古城利明は、「*「境界領域」のフィールドワーク*」が、「3.11」によって直視せざるを得なくなった「物理的な限界」の問題を取り込む「エピステモロジー／メソドロロジー」を十分に練り上げていない、あるいは先送りしており、それは、「生存の在り方」を問う」なかで、また「人間の境界線」の揺らぎを問うなかで自覚的に取り上げられるべきであると指摘した（同書、442-443ページ）。本来向き合うべき根源的な問題を見過ごし、定型化した「問題解決」の「型」にむけて「努力をする」というかたちで問題を「先送り」していくという思考態度 (mind-set) から“ぶれてはみ出す”ことへの真剣な「問いかけ」が発せられたのである。

5 “うごきの場に居合わせる”

古城利明から託された根源的課題である〈「3.11以降」の惑星社会と人間の限界から始める「学」〉のためのフィールドと理論・方法の再構築について、まず考えたことは、“境界領域のフィールドワーク (Fieldwork on “the frontier/liminal territories”)” から“惑星社会のフィールドワーク (Esplorando la società planetaria, Exploring the Planetary Society for scouring, traversing, exhuming and comprehending the social structure and underlying human energy in the planetary society, for perceiving the pulse of biotic, relational creativity)” への組み直しであった。こうして、『*惑星社会のフィールドワーク*』という編著書にむけての準備をすすめていたが、そのなかで、過去の調査体験を「掘り起こし」「生かし直す」ことの重要性を再認識し、書名は、『*うごきの場に居合わせる——公営団地におけるリフレクシヴな調査研究*』（新原道信編著、中央大学出版部、2016年）となった。

書名を変更したのは、以下の理由に拠る。「3.11以前」に試みられた二つの「プロジェクト」(湘

南プロジェクトと聴け！プロジェクト）では、結果的に長期間にわたるものとなったことによって、地域小社会、コミュニティ、あるいは集団内で起こっていたいくつかのささやかな生活の「断片」「諸関係の微細な網の目」が「うごいていく場面（nascent moments）」に遭遇している。それらが実は、「惑星社会の問題がもたらすジレンマの側面」を持っていたこと、その事実に出会うために選択せざるを得なかった思考と行為（フィールドの再設定、理論・方法の見直し）の意味を“すくい（掬い／救い）とり、くみとる（scoop up/out, scavare, salvare, comprendere）”ことの重要性に気付いたからである。すなわち、冒頭のM. モリスの言葉で言えば、「人と場所に応じて様々に異なるグローバリゼーションの構造と実態」を、「背後に横たわる大きなプロセスや縦横のネットワークを分析し、自分がおこなったケース・スタディに意味づけをする」ことが、“惑星社会のフィールドワーク”の条件となる。そのために、「問いのレベルにおけるフィールドを再構築」（メルッチ）し、“臨場・臨場的な在り方（ways of being involved in the crude reality）”で“生身の現実（crude reality）”にふれる／かかわる／“拘束／絆（servitude humana/human bondage）”を持つこと、すなわち、“うごきの場に居合わせる（being involved with the field, Il gioco relazionale nel campo di azione）”という〈エピステモロジー／メソドロジー／メソッズ〉を、暗黙知から明示的な智へと、あらためて浮かび上がらせた。

“うごきの場に居合わせる”とは、たったひとりで異境の地に降り立ち、うごきの場に居合わせ、拘束されつづけることを、複数の人間が切り結びつつすすめていくという営みをふりかえり、実はそこに芽吹いていた、「オルタナティヴの材源を探し回り、埋もれた記録を発掘し、忘れ去られた（廃棄された）歴史をふたたび生かす（reviving）」ことを主要な責務としている。すなわち、粘り強く丹念に、渉猟し、徹底して探しまわり（scouring）、踏破し（traversing）、掘り起こす（exhuming）、掬いとる（scooping up）、「取り戻す、生かし直す（reappropriate）」、「確立し直す、再構築する」という営みである¹⁵⁾。

メルッチ、メルレル、新原は、この点について、以下のように考えている：

グローバル化・ネットワーク化と同時に、根源的な有限性の問題を抱える“惑星社会（the planetary society）”とそこで地域生活を営む具体的な個々人の内面から構造をとらえたい。しかしながら、調査者にとっても日常生活者にとっても、いままさに生起しつつある（nascente）“未発の状態”¹⁶⁾を洞察することはきわめて困難である。なぜなら私たちは常に、過去の思考の形式・準拠枠によって、現在を見ている（たとえば、個人や構造を外側から見る思考や、ミクロをミクロとして見るような「知的様式（intellectual style）」によって拘束されている）からだ。

矢澤修次郎が指摘するように、「経験的リアリズム（自らの「知覚」のみがリアルだとする実証主義）」のみ、あるいはその対極に位置する「観念・概念こそがリアルだとする超越論的観念論」のみに頼ることは出来ない。「限界状況の想像・創造力（imagination and creativity of

limit-situation)」、あるいは、「危機の瞬間の想起」という観点から考えるならば、はっきりと“知覚 (percezioni, Wahrnehmungen)”されるものではないにせよ、様々な“兆し・兆候 (segni, signs)”には、実はすでに遭遇していたかもしれない。“知覚”としては、「未だ発現していない」ものではあるが、“予見 [的認識を] する (prevedere)”とはいかないまでも、やって来る“事件 (avvenimenti, events)”の“兆し・兆候”を“うっすらと感じる／予感する (ahnen)”ことはあるのではないか。そして自分でも十分な「自覚」や「意識」をもたなかったとしても、非意識的に、“心身／身心現象 (fenomeno dell'oscurità antropologica)”としては、微細な「うごき」を始めてしまっているのではないか。すなわち、〈内的なプロセス、目に見えない、当人にしか体感し得ない、生理的・感情的なプロセス〉と同時に、〈顔の表情やしぐさ、雰囲気などの身体表現〉によって、「媒介された」“兆し・兆候”，時として「災いの前触れ (an omen of disaster)」、あるいはまた“多系／多茎の可能性”を、潜在的に、あるいは身体表現として、perceiving, listening, sensingしているのではないか。

それゆえ，“未発”であるとされた局面をもう一度見直していくと、実はすでに「そこに在った」ものを“サルベージ (沈没、転覆、座礁した船の引き揚げ, salvage, salvataggio)”することが出来るかもしれない。さらには、ある特定の条件，“根本的瞬間 (Grundmoment)”においては、過去と未来という非在の間の全体である「直接的な現在」のなかで、「生まれつつある、生起しつつあるうごき (movimenti nascenti, nascent movements)」をとらえることも出来るのではないかと考えた。ここから，“未発の状態”と“毛細管現象／胎動／交感／個々人の内なる社会変動／未発の社会運動”，すなわち，“地域社会／地域／地”という“うごきの場”をとらえるための理論と方法に自覚的に着手することになった。

6 “うごきの比較学 (“Comparatology” of nascent moments)”へ

『うごきの場に居合わせる』を刊行後、このテーマに関する“対話的なエラボレイション (co-elaboration, coelaborazione, elaborazione dialogante)”のなかで、“うごきの比較学 (“Comparatology” of nascent moments)”という方向性が定められた。なぜいま、“うごき”のなかに在ることがらを「比較」しようとするのか？ なぜいまなのか？ それはいかなる意味を持つのか？

「3.11以降」の社会の“生存の在り方 (ways of being)”の見直し、“未発の状態”の常態化という状況に対して、私たちは、これまで“境界領域のフィールドワーク”という観点から、〈エピステモロジー／メソドロジー／メソッズ／データ〉を錬磨してきた。しかし、そのうえで、「うっすらとした (カタストロフへの) 予感」がもはや顕在化してしまった現在に固有の、〈理論／方法論／対象／調査の技法・技量／テーマとリサーチ・クエスチョン／データ〉への「転換」の必要性が自覚された。〈エピステモロジー／メソドロジー〉から〈メソッズ〉という「理論・方法と適用」という方向性でなく、〈エピステモロジー／メソドロジー／メソッズ〉の同時的

な“メタモルフォーゼ（変異change form / metamorfosi）”をする必要性である。

そこでの「フィールド」は、「自明」の境界線が引かれた固定的な「領域」ではなく、「変化の道行き」にあることを常態とする“うごきの場、特定の空間が特定の瞬間に在る状態（field, nascent moments, momenti nascenti）”となる。「地域小社会」「コミュニティ」、あるいは「集団」内で起こっていたいくつかのささやかな生活の「断片」「諸関係の微細な網の目」が「うごいて」いく場面——に“居合わせる、決定的な出来事が生起しつつある瞬間に偶然にも居合わせる（Being there by accident at the nascent moments in which critical events take place）”ことで、惑星社会の諸問題（the multiple problems in the planetary society）がもたらすジレンマの意味をとらえなおし、〈エピステモロジー／メソドロロジー／メソZZ〉を練成することが、“惑星社会のフィールドワーク”の眼目となる。そのためには、一見まだ、何かがやって来ていない時間帯にも、デイリーワークとして、その場に居続けるという「仮借なき〔博識の〕探究（a relentless erudition）」が必要となる。

“うごきの比較学（“Comparatology” of nascent moments）”は、「ビッグデータによる国際比較」との「位置どりの違い」、すなわち、「博物学」（南方熊楠）あるいは、「人文的／人間的な素人」（ベラー）の見直しの側面を持つ。メルッチ、メルレル、新原の“比較学”の最大の特徴は、ともすれば途中で空中分解してしまいそうなりリスクを受け入れつつ、ものごとを考えていくときの〈枠組そのものを考えるところから始め〉、しかも、その新たな着想に基づく枠組を目に見えるものへと組み立てることである¹⁷⁾。

これはまた、うまくいかない危険を引き受けることでもあり、playing&challengingである。その“道行き・道程”は、いつも不全、未完であり、「終わりが無い語り（una storia infinita）」とならざるを得ない。「科学」（範囲を限定し何を明らかにするのかをあらかじめ確定したうえで「すべてを正確に」という知り在り方）の一部を犠牲としても、全景把握をめざすことを意味する。

“うごき（nascent moments）”をとらえるメソZZはその場で生み出される一回性の色合いを持つ。しかも、“場”そのものへの方向づけと関係性をあらかじめ定めきれないコミットメントとなる（『うごきの場に居合わせる』でふりかえった「プロジェクト」などに端的に現れている）。そのため、「終わり」「限界」を前提として“居合わせる（Being there by accident at the nascent moments in which critical events take place）”しかないが、いつがその瞬間（in which critical events take place）なのかは、予見は困難であり、その場で何が起きているかはまだわからない（「得心」するかたちとはなっていない）。それゆえ、なにかひっかかった瞬間（「もしや」という「うっすらとした予感」）をエピソードとして“描き遺す”しかないと考えた。グローバル／プラネタリーな社会運動の背後で、遠く離れた場所で、水面下で生起しつつある“うごき”，そして、肉声のなかの生命の連続性と断絶にまつわる記憶——このエピステモ

ロジーに即して、「ペリペティア (peripeteia)」¹⁸⁾の瞬間から、「生起したことから」を“サルベージ (沈没, 転覆, 座礁した船の引き揚げ, salvage, salvataggio)”するというのが当面のスタイルとならざるを得なかったのである。

7 むすびにかえて——最初の沖縄・広島・長崎調査とサルデーニャでの比較調査を「掘り起こす」

本稿は、「問題解決」ではない「限界状況の想像・創造力 (imagination and creativity of limit-situation)」としての“臨場・臨床の智 (cumscientia ex klinikós, living knowledge)”を把握するため、〈エピステモロジー／メソドロロジー／メソツズ〉として、“うごきの比較学 (“Comparatology” of nascent moments)”に着手した経緯を見てきた。

“うごきの比較学”は、“コミュニティ・スタディーズ／地域学 (Terranology, terranologia) / 比較学 (Comparatology)”の有機的結びつきにより構築されるべきものである。個別性・固有性を持った場所における“地域社会 (region and community)”のコミュニティ・スタディーズを基本としながら、特定のコミュニティの背後にある“地域社会／地域／地 (region and community/field/terra)”の全景把握を試みる“地域学 (Terranology, terranologia)”を内包している。惑星社会のもとでの“移行, 移動, 横断, 航海, 推移, 変転, 変化, 移ろいの道行き・道程 (passaggio)”に在る“うごきの場に居合わせ”, その場の組成が持つ“衝突・混交・混成・重合”, 「錯綜」の動態を, 比較のなかで把握することを試みるのが, “うごきの比較学 (“Comparatology” of nascent moments)”ということになる。この“比較学”は, 内省としての“サルベージ”と, 多系／多茎の可能性の探求としての“惑星社会のフィールドワーク”を対位的な構成要素とする。

“サルベージ”に関する当面の課題は, (矢澤・古城両教授たちの教導のもとでなされた) 1985年から1989年にかけての沖縄・広島・長崎調査と, (メルレルとの出会いのきっかけとなった) 1987年サルデーニャでの比較調査を「掘り起こす」こと, サルデーニャと沖縄の比較という地域 (空間) 的な“比較”を, ことなる時間の流れのなかで“比較”するという立体構造をもったリフレクションを行うことである¹⁹⁾。“探究／探求の技法 (arti di ricerca/esplorazione, Art of exploring)”は, “うごきの場に居合わせる (Being involved with the field, Il gioco relazionale nel campo di azione)”ことをし続けるプロセスとして存在する。“叙述・伝達の技法 (arti di rappresentazione, art of representations)”としては, “居合わせた”事実を, 調査者の体験 (research experience) と結び合わせ, 時間・空間を領域横断するかたちで再構成していく。そのときは理解できなかったが, 実は, 何が起こっていたのか, 何が予見されていたのか, 調査者である「私 (たち)」は何を見過ごしたのかをつかみ直す試みである。

最初の沖縄・広島・長崎とサルデーニャでの調査は, 仮設枠組みから比較可能性を確保した

うえでの国際比較研究であった。その後の“うごきの場に居合わせる（Being involved with the field, Il gioco relazionale nel campo di azione）”という歩みにより、沖縄本島（と「日本本土」という対立軸）から、“ぶれてはみ出し”，石垣・宮古，南北大東島，奄美大島，サルデーニャの内陸部や島嶼部という“端／果て（punta estrema/finis mundi）”，“深層／深淵”へと、呼び込まれていった²⁰⁾。

「サルページ」と“対比・対話・対位”させるための新たな“惑星社会のフィールドワーク”としては、サルデーニャ、沖縄・長崎での調査を予定している²¹⁾。

高みから裁くのでなく、地上から、いま／ここから始めるための認識枠組みと言葉を選んでいく。いずれは意味を持つ旋律となるかもしれないデータ／エピソードを“対位法”的に収集・蓄積し、「あくまで可能な筆写のひとつ」（メルッチ）を遺していくこと。つまりは、関係性の根（roots of relationship）、関係性の道行（routes of relationship），“関係性の動態を感知する（perceiving the passage of relationship）”ことだ。

「限界」の認識の“他端／多端”には、構造決定論でも認識主体の無限の自由でもなく、多系の領野が在る。ただこの、多系の動きとして存在しているものを、自らの認識もまた動いていくなかでとらえていくには、「近代的な認識主体が現実を線形にとらえる」ことから“ぶれてはみ出す”必要があるのかもしれない。そう考えると、“未発”を常態とする“見知らぬ明日”は、「無限の多様性に開かれた時空」（浅野慎一）として在り続けている。いまここにある「いくつもの可能性の空」（メルレル）を察知する“うごきの比較学”を創っていけたらと思う。

まずデータの観察と蒐集から初めて、さまざまなデータを分類し、各々のカテゴリーの属性の共通点と相違点をしらべる。そしてことなる属性をもつことになるカテゴリーの事物の間の関係をしらべ、抽象度の低い『実体的』理論から、しだいに抽象度の高い『形式的理論』へと、累積的に調査研究をすすめる。そこでは仮説の検討が目的ではなく、ことなるカテゴリーとその属性のあいだの新しい関係を発見していくことが目的である。したがって、事物の関係の発見のために用いられる仮説または仮説の体系は、単一ではなく、発見に役立つかぎりにおいて、複雑であり、多様であってよい。」「比較をするためには、まず異なるカテゴリーに対象を分類し、「分類された個体または集団を、きり離して、別々のものとしてその固定され区分けされた属性を比較するだけでは不十分なのである。」「異なる種類に分類されたものどうしのあいだに、相互作用があることに注目し、その相互作用をとおして、それぞれ固有と思われた属性が変化すること」を念頭におく（鶴見和子『南方熊楠——地球志向の比較学』講談社、1981年、178ページ、182ページ。Cf. Barney G. Glaser and Anselm L. Strauss, *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, Aldine Publishing, 1967).

付記：本稿は、新原道信が研究代表者として取得した研究助成金——中央大学特定課題研究費「惑星社会の「限界を受け容れる自由」に関するリフレキシヴな比較調査研究」（2016年度）、前川財団家庭教育研究助成金「“コミュニティを基盤とする参与的行為調査”による“臨場・臨床の智”の伝達に関する実証的研究」（2015年度）および「大学の『第三の使命（コミュニティを基盤とした調査と教育の試み）』に関するイタリアとの共同研究」（2016年度）、科学研究費・基盤研究B海外学術調査「“惑星社会”の問題に回答する“未発の社会運動”に関するイタリアとの比較調査研究」（2015年度から2018年度）によって実施した調査研究活動の成果が含まれている。

注

- 1) “臨場・臨床の智 (cumscientia ex klinikós, living knowledge)” 概念については、新原道信『旅をして、出会い、ともに考える—大学で初めてフィールドワークをするひとのために』中央大学出版部、2011年、191-197ページで、概念整理を試みている。その他、新原道信「出会うべき言葉だけを持っている—宮本常一の“臨場・臨床の智”」『現代思想 総特集＝宮本常一 生活へのまなざし』vol.3915, 2011年；新原道信「現在を生きる『名代』の声を聴く—“移動民の子供たち”がつくる“臨場／臨床の智”」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学22号（通巻243号）、2012年などで論じてきている。

“臨床”すなわち“床に臨む智”とは、たとえば誰かが“受難者／受難民 (homines patientes)”となり、どんなふうに声をかけたらいいかわからない、しかし気持ちだけでも寄り添い、少しでも「相手のこと」を理解しようとしたい、というときに求められる、他者との「間」の関係性構築の力である。距離的な近さや「専門性」とは必ずしも相関せず、“受難者／受難民”の側からの想起と、“受難者／受難民”への“想像力”との相互作用として立ち現れる。

“臨場”が、同じ力を能動の側面から見ているのだとしたら、“臨床”は、受動のなかの能動の側面から見ているということになる。フィールドワーカーの理想は、特に自分から「うごく」ことがなくても、相手からやってきてくれるという状態である。しかしその状態は、「他者」の様々な困難（受難の体験）もまたやって来ることを甘受すること、遮蔽しようと思えば出来ないことはないと思われることがら、“識る”ことの恐れを抱くことがらをあえて境界をこえて選び取り、“引き受け／応答する (responding for/to)” ことと不可分でもある。この状態へと至る道は、まず自分から始め、ひたすら、「失敗」し、恥をかき、そこから学ぶことでもあり、まずは「うごき」始めるしかない。しかしただ、以前と同じような「行動」をとり続けるのではなく、いまの自分の「うごき」（沈黙や停滞や興奮や動揺なども含めて）を“臨場／臨床”の観点からとらえなおしてみようとし続けるという点で、“対話的にふりかえり交わる (riflessione e riflessività)” という側面を持つ。

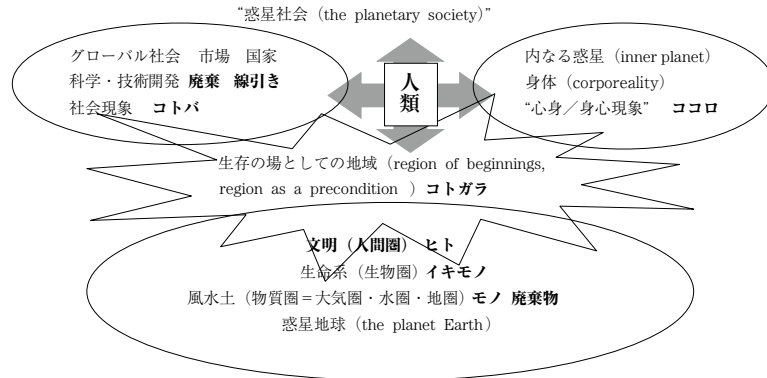
“智”という漢語には、ラテン語系の言葉で、cum（いっしょに）、scientia（“識る＝scire”こと）という組み立てのcumscientiaという造語を対応させている。“智 (cumscientia)” は、日々の仕事や暮らしのなかで培われた個々の“智恵 (sapere)” と、それらが結びつけられて、ひとつのまとまりをもったものとしての“智慧 (saggezza)”，そして、複数の「知 (scienza)」を組み合わせひとつのまとまりとなった“知恵 (sapientia)” とが、そのひとに独自の仕方では結びつけられているものである。

「みる」ときも、「うごく」ときも、共通して大切なのは、“臨場／臨床”という関係性をもって“ことに臨んで”いるかどうかとなる。たとえば、「みる」ことに全身全霊を尽くしていれば、「ここぞ」というときに機会を逃さず「うごく」ための条件を持つ。他方で、その場をやりすごすためだけに、周囲の空気にあわせて「動いて」いるだけだったら、ここぞというときには、臨場感をもって「黙って」「みて」いたひとよりも、「うごく」ことは出来ない。

- 2) “地域社会／地域／地 (region and community/field/terra)” は、ここでのフィールドワーク（“惑

星社会のフィールドワーク”）が，“引き受け／応答する”相手となる圏域である（“地域社会／地域／地”の図を参照されたい）。

“地域社会／地域／地”の図



◇“生存の場としての地域”は、モノ [風水土 (物質圏=大気圏・水圏・地圏)], イキモノ [生命系 (生物圏)], ヒト [類的存在としての人類の文明 (人間圏)] によって構成される。ひとつのローカルな単位となった“惑星社会”を支えている“生存の場としての地域 (region of beginnings, region as a precondition)”は、“廃棄 (dump[])”も“線引き (invention of boundary)”も出来ないひとつの単位 (element) として存在している。「市民」「国民」「正常」「健常」といった「区分」(“線引き”) によって生じる「選別・排除」によって、「外部」へと「移譲」したり、根絶・排除することが出来ない“異物 (corpi estranei)”が (再帰的な移動をしつつも) 常住する。

すなわち、都市・地域の社会 (科) 学が設定する“地域社会 (region and community)”の背後の“地域 (regione, region, area, zone, territory, field, element)”, さらには、その“地域”の背後の“地 (terra, ground/soil)”“地球 (Terra, the planet Earth)”である。“地 (terra)”の固有性と行き会う／生き合うことで蓄積されてきた“智恵 (sapere)”“智 (cumscientia)”が、“臨場・臨床の智”の土壌を形成している。この認識のもと、下記のような理解をしている：

◇学問 (危機の時代の総合人間学としての社会学的探求) は、《〈モノ (物財)―コトバ (意識, 集合表象)―ココロ (心身／身心現象)〉の“境界領域”にある〈コトガラの理 (=ragioni di cosa/causa, cause)〉を探求する営み》である。

◇地域社会研究は、《社会構造の移行・移動・横断・航海・推移・変転・変化・移ろいの道行き・道程 (passaggio) に着目し、そこに生起する、複合・重合的で多重／多層／多面のコースをとらせ、個々人と社会のメタモルフォーゼ (変異 = changing form / metamorfosi) の条件を探求／探究する営み》である。

◇質的社会調査の根幹は、関係性の動態を感知する (percepire il passaggio di relatività, perceiving the roots and routes of relationship) ことへの「仮借なき [博識の] 探究 (a relentless erudition)」である。

- 3) 新原は、現在に至るまで、サルデーニャと沖縄の比較研究に始まって、ケルン (ドイツ), コルシカ (フランス), エステルズンド (スウェーデン), ロスキレ (デンマーク), サンパウロ, リオデジャネイロ, エスピリット・サント (ブラジル), 広島・長崎, 小樽・札幌, 川崎・横浜, 奄美, 対馬, 石垣, 竹富, 西表, 南北大東島, 周防大島, 神奈川の多文化・多言語混成地区, 立川の公営団地 (以上, 日本), マカオ (中国), 済州島 (韓国), サイパン, テニアン, ロタ (以上, アメリカ合衆国の

自治領である北マリアナ諸島), オーランド(フィンランドの自治州), イストリア(スロヴェニア, クロアチア), トレンティーノ＝アルト・アディジェ, ヴァッレ・ダオスタ, フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア(以上, イタリアの特別自治州), アルプス山間地(スイス, イタリア), リスボン, アゾレス(ポルトガルの自治地域), カーボベルデなどでフィールドワークを行ってきた。

そのなかで, いくつもの多重/多層/多面の「境界(finis)」が“衝突・混交・混成・重合”しつつ「ともにある(cum)」場としての“境界領域(cumfinis)”—(1)“テリトリーの境界領域(frontier territories, liminal territories)”, (2)“心身/身心現象の境界領域(liminality, betwixst and between)”, (3)“メタモルフォーゼの境界領域”という三つの位相から考え, 知見を蓄積してきた。そこでは, サルデーニャや沖縄といった地理的・客体的な問題設定が, 実は個々人の身体に刻み込まれた—個々の内なる“深層/深淵”, 間主観性, 精神の境界の問題性を潜在していることに気付かされた。さらにこの一連の調査研究のなかで明らかになったのは, 顕在化するか否かにかかわらず, “毛細管現象”として, “未発”であることを常態として“衝突・混交・混成・重合”し続ける社会的プロセスと深くかかわるところの“メタモルフォーゼの境界領域(metamorfofi nascente)”の重要性である。ひとまずの区切りとして, これまで30年ほどの歳月をかけて練り上げてきた“境界領域のフィールドワーク”の〈エピステモロジー/メソドロロジー/メソツズ/データ〉の到達段階・限界・課題を診断するという意図で, 新原道信編著『“境界領域”のフィールドワーク—惑星社会の諸問題に回答するために』中央大学出版部, 2014年を刊行した。

- 4) “[対話的にふりかえり乱反射しつつ交わる] リフレクシヴな調査研究(Reflexive research, Ricerca riflessiva)”は, C. W. ミルズ, A. グールドナー, P. ブルデュー, A. メルッチ, A. メレルレ等の“リフレクシヴな社会学”(「科学の社会学」「社会学の社会学」「反射的反省性(réflexivité réflexe)」の社会学「聴くことの社会学」)の流れのなかに位置づけられる。「社会調査(social research)」は, 現になされてきた/なされている調査実践, 調査の「メソドロロジー」(「データ収集」と「解析」において採用される「統計的方法」あるいは「事例研究法」など)とかかわる言葉である。地域社会問題の解決を志向し, 特定のコミュニティをフィールドとして, 統計的方法のみならず観察法や面接法を駆使する「社会踏査(social survey)」は, 参与的行為調査(Participatory Action Research), あるいは, 療法的(Therapeutic)側面を持つ。これに対して, “リフレクシヴな調査研究”は, 「メタコミュニケーション」の在り方(関係性の切り結び方)とかかわる言葉であり, メルッチの言い方では, “対話のなかで, 解釈の配置変えをしていくことに対して開かれた理論(theorie disponibili)”である。従って, “療法的でリフレクシヴな調査研究(Therapeutic and Reflexive Research(T&R))”, あるいは, “[対話的にふりかえり交わる]リフレクシヴな社会調査(Reflexive social research)”という表現のなかには, 調査実践の「メソドロロジー」と「メタコミュニケーション」をどのように接合させるのかという「エピステモロジー」への「問い」が内包されていることになる。“コミュニティを基盤とする参与的行為調査(Community-Based Participatory Action Research(CBPAR))”の場合は, 「エピステモロジー」としての〈島嶼社会論〉が別立てに存在している。〈惑星社会論〉〈聴くことの社会学〉もまた, 単に「理論」でも, 調査の「メソドロロジー」でもなく, 「エピステモロジー」として立てられている。

“リフレクシヴな調査研究”は, (1)社会理論, (2)調査方法論, (3)知のネットワーク化の三点で学術的な特色を持つ。

(1)「9. 11」からアフガニスタン, イラク, 世界金融危機, さらに東日本大震災と, システム化・グローバル化がもたらす個々人の社会的痛苦に起因する社会紛争と社会危機はきわめて深刻な国際社会問題となっている。こうした複合的問題(the multiple problems)は, 可視的な制度等に着目する国際・社会学あるいは地域・社会学, 可視的な出来事を対象とする社会運動論でとらえきれなくなってきた。膨大な事例研究を基礎づける理論と方法の見直しが求められており, 国際社会その

ものに関する学（惑星社会論）、システム化・グローバル化する地域社会で現に起こりつつある“うごき”をとらえる理論・概念・カテゴリー（未発の社会運動論）が求められている。本調査研究によって、惑星社会論と未発の社会運動論のさらなる展開と拡充を実現すれば、イタリア、日本社会のみならず、世界各地で生じつつある微細な動きが、これからの惑星社会にもたらす意味をとらえることが可能となり、波及効果はきわめて大きい。

(2) 可視的な出来事の背後の微細な動きをとらえるための調査方法論としてのリフレクシヴな調査研究は、初期シカゴ学派のように、living societyのなかで、学生・院生も含めて社会学や社会調査の理論と実践について膨大な議論を積み重ね、フィールドで出会った予想外の困難に導かれるかたちで、複数のメソッドを生み出すメソドロジーである。仮説生成型の本調査法においては、調査者側の当初の作業仮説とは異なる理解のあり方、現象の現れ方、相関関係などに出会い、予想通りにいかない場合が、最も貴重なリフレクションの場を提供するかたちで設計されている。フィールドワークをすすめるなかで、いかなる困難に直面するかをデータ化し、国内と海外の研究メンバー、現地の当事者との間で多重／多層／多面の意味づけと対話によってコード化し、再解釈をすすめていく。

(3) 調査結果については、その途中経過も含めて、ヴァルジウ・メルレル・新原が中心にかかわる国際的なネットワークであるLiving Knowledge (<http://www.livingknowledge.org/livingknowledge/>)と、野宮・矢澤が中心にかかわる「社会運動の社会学」の国際的ネットワークに開示する。調査で得られた知見の意味を解釈する創造的プロセスを公共化することにより、展開・拡充をつづけるLiving Knowledge（臨場・臨床の智）であることに特色・独創性を持つものである。

- 5) 「3.11以降の惑星社会」（2013～2015年度）チームの研究成果をとりまとめとして、新原道信「A.メルッチの「創造力と驚嘆する力」をめぐって—3.11以降の惑星社会の諸問題に応答するために(1)」『中央大学社会科学研究所年報』18号、2014年；新原道信「“受難の深みからの対話”に向かって—3.11以降の惑星社会の諸問題に応答するために(2)」『中央大学社会科学研究所年報』19号、2015年；新原道信「『うごきの場に居合わせる』再考—3.11以降の惑星社会の諸問題に応答するために(3)」『中央大学社会科学研究所年報』20号、2016年のかたちで論考をとりまとめた。本稿もまた、「フィールドのなかで書くこと（writing in the field, writing while committed）」を基調に、「複数の目で見て複数の声を聴き、複数のやり方で書いていく」試みとして、本年報に掲載予定の鈴木鉄忠「惑星社会における「日常生活の網の目」の探究—“うごきそのものへ”にむけた方法論の検討」、そして阪口毅「『都市エスニシティ』論以降のコミュニティ研究—出来事と水脈の比較研究序説」という二つの論稿と共鳴するかたちで執筆されている。
- 6) 「惑星社会」という「もののみかた」については、新原道信「“惑星社会の諸問題”に応答するための“探究／探求型社会調査”—『3.11以降』の持続可能な社会の構築に向けて」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学23号（通巻248号）、2013年；新原道信「“境界領域”のフィールドワーク(3)—生存の場としての地域社会にむけて」『中央大学社会科学研究所年報』17号、2013年などを参照されたい。惑星社会は、きわめて“複合・重合”的な、ひとつのまとまりをもった有機体として形成されており、問題は複雑さや微細さとともに立ち現れる。しかしそれゆえに、自分が属している小さな場（いまここで）から始める可能性を秘めている。惑星社会の問題は、個々人の社会的痛苦の問題として現れる。「内なる異質性」の問題が顕在化したコミュニティに暮らす個々人は、「環境・エネルギー政策」「高齢化」「家庭教育」「青少年問題」「被災者支援」等々、異なる諸要素をひとつに「整理」し理解・対処せざるを得ない状況のもとで、従来の「処方箋」では十分に対応出来ず、多面的で多層、多重の困難に直面している。不満、不安、苦悩、アルコール依存、薬物依存、病、狂気、自殺など、痛みや傷みは、澱みとなって滞留し、ある日突然、社会的な事件として噴出するという波動への着目がますます重要となって来ている。

- 7) 「3.11後」ではなく「3.11以降」という言葉を選択したことの背景には、「突然、想定外の事件が起きたが、それは『おわた』こととなり、また『もとどおり』のありかたへと復興していく」という思考態度とはことなる方向性がこめられている。「3.11後」はなかなか始まらず、今後の社会の行く末が定まらぬまま、岐路に立ち続けている。この観点から、以下のような論考を積み重ねてきた：新原道信「A. メルッチの『限界を受け容れる自由』とともに—3.11以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求（1）」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学24号（通巻253号）、2014年；新原道信「“交感／交換／交歓”のゆくえ—「3.11以降」の“惑星社会”を生きるために」似田貝香門・吉原直樹編『震災と市民2 支援とケア：こころ自律と平安をめざして』東京大学出版会、2015年；新原道信「A. メルッチの“未発の社会運動”論をめぐって—3.11以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求（3）」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学26号（通巻263号）2016年などを参照されたい。
- 8) メルッチは、惑星社会論の端緒となった主著『プレイング・セルフ』のなかで、下記のように述べている。

こんにち必要なのは、問題のなかに予め答えが含まれているような問題解決だけではなく、新たな問いを立てることに私たちの創造的な力を向けることであるということが、ますます明らかになってきている。もし創造性と問題解決とを同一視してしまうと、創造的活動は、必ずしも所与の問題に対する解答を導くものではなく、むしろそれは提示された問いのレベルにおけるフィールドを常に再構築することを要求するのだ、という事実を見落としてしまうだろう。芸術のように、問題を解決するわけではない創造的活動が存在するし、またある一定の枠内に制約された創造的とはいえ問題の解決だって存在する。私たちの社会は、創造的プロセスを促す個人の資源を発展させていくという試みに直面している。すなわちそれは、リスクを受け容れ、規定できないものを甘受し、既に知られ、分類され、決定されていたかに見えるものを、一時保留にすることを厭わないような能力である。それはまた私たちの心を開き、新たな領域を切り拓くために、自分自身の抑制や不安定さを乗り越えていく能力である。それゆえ創造力とは、それがいかに定義されようとも、驚嘆するという私たちの能力にかかっているのだ。（Alberto Melucci, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, New York: Cambridge University Press, 1996年＝新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ—惑星社会における人間と意味』ハーベスト社、2008年、196ページ）

- 9) 現代アメリカの私的・公共的性格をめぐる中産階級の言語と道徳的推論に関心をもったR. ベラー（Robert Bellah）たちの研究グループは、「共通の関心めぐるの同胞市民との対話ないしは会話」「能動的なソクラテス的なインタビュー」による共同研究の成果である『心の習慣』のなかで、方法的な補遺として、「公共哲学としての社会科学」という付論を設けた。同研究は、専門家たち（community of the competent）のみならず公衆を、対話の世界に引き込むことを目指し、preconceptionや問いを会話に持ち込み、答えを聞き出しながら、それを言語に現れた面のみならず、出来る限り話し相手の人生（実生活）のなかで理解するようにところがけ、話し相手が暗黙のままにしておきたかったかもしれないものを浮かび上がらせようと試みた。この付論においてベラーたちは、およそ以下のような「エピステモロジー／メソドロギー」を提起していたと理解し得る：

専門科学は、単一の変数の抽出を理想とする、還元主義的な形態、全体の存在を否定し社会をばらばらの個人と集団の集積物と見る。全体への責任、他の部分についての責任を負わない個別科学から、社会科学をいまいちど学問へと復権させたいと考え、総観的（synoptic）な見方、古い伝統、トクヴィルのような「人文学愛好家（humanistic amateur）」の“智”を再評価する。そこでは、データの収集と活用という観点から不備を随伴していたとしても、社会全体に対する認識、家族、宗教、政治、経済の相互の結びつき、社会と国民性との相互影響関係についての認識の深さがある。哲学的な社会科学は、実質的な伝統へのコミットメントに基礎をおいて社会を理解しようとする。個々

の事実、全体についての概念に形と輪郭を与えることのできる準拠枠のもとで解釈される。これは、学際的な研究によってこと足りるものではなく、学科や分野相互の境界、とりわけ人文科学（文化的伝統の継承と解釈）と社会科学（純粹観察という特権的地位を持つ）という恣意的な境界をこえることを必要とする。それゆえ、公共哲学としての社会科学は、社会自身の自己理解あるいは自己解釈の一形態となる。つまり、社会の伝統、理想、願望と現在の現実と並置する。公共哲学としての社会科学に携わるものは、学者が語る物語と社会一般に流通している物語とを結びつけ、両者を相互的な討論と批判にさらすよう努力する。公共哲学は「価値自由」ではありえない。こうした調査の途上では、社会の理解と自己理解、調査結果の分析と道徳的な推論とが同時に起こり、調査者は彼が研究している社会の伝統との間に折り合いをつけねばならないのである（Robert N. Bellah et al., *Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life*, The University of California, 1985年＝島蘭進・中村圭志訳『心の習慣—アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房、1991年、357-369ページより要約）。

- 10) この場では、クーン教授によって、「グローバルな英語的現象としての社会科学理論によって、『客観性』が『構築』されていく一方で、それぞれの国に固有の社会科学が存在している。どうしたら、国単位の社会科学をのりこえることが出来るか。この30年の社会科学は、自然科学化しているが、自然科学は相対的真理に過ぎない。現在の社会科学をこえてオルタナティブな知の構築へ」という報告がなされた。この報告を受けて、矢澤修次郎教授より、「グローバル・ソーシャルとは何か、disciplinary thinkingの特徴とその問題点、科学的知識の短命な知識への対抗を如何にするか」といった点についてのコメントと解説がなされ、さらに、クーン教授の問題提起に対して、参加との質疑応答を行い、「社会科学は私たち自身についての知だ。私たちがどのように教育されてしまっているかを考えること。身体的体験を大切にすること」等々の応答がなされた。
- 11) 新原道信「『3.11以降』の惑星社会の諸問題を引き受け／応答する“限界状況の想像／創造力”—矢澤修次郎、A.メルッチ、J.ガルトゥング、古城利明の問題提起に即して」『成城社会イノベーション研究』第10巻第1号、2015年において、詳しく紹介し、矢澤の問題提起に応答するために、「知の転換点」と「すべてがローカル、逆立ちしたグローバルなシステム＝共同体」「外のない惑星」とメルッチの予見的認識としての惑星社会論、「事例の意味をとらえることができていない」ことへの自覚と『“境界領域”のフィールドワーク』の限界、「存在論、認識論までさかのぼって再検討」と「知的様式 (intellectual style)」への着目、「ターミナルとしての個人の質」と“限界状況の想像／創造力 (imagination/creativity of limit-situation)”という観点から考察をしている。
- 12) Johan Galtung, “Sinking with Style”, Satish Kumar (edited with an Introduction), *The Schumacher lectures. Vol.2*, Blond & Briggs, 1984, 1-22ページ(=耕人舎グループ訳『シュマッハーの学校—永続する文明の条件』ダイヤモンド社、1985年、3-28ページより。経済学者E. F. シューマッハー (Ernst Friedrich Schumacher) の後継者としてシューマッハー・カレッジを運営する思想家S. クマール (Satish Kumar) が編集した *The Schumacher lectures. Vol.2*には、平和研究者J. ガルトゥング (Johan Galtung) のSinking with Style (「優雅に品よく没落を」) という論考が収録されている。1984年に刊行された同書は、翌年の1985年、シューマッハーの「スモール・イズ・ビューティフル」に賛同し和歌山県那智勝浦町で有機農業を実践する耕人舎グループによって翻訳され、ダイヤモンド社より、『シュマッハーの学校—永続する文明の条件』というタイトルで刊行されている。ここでガルトゥングは、すべてを「計量」の対象とする社会システムに「なしくずし的に加担していく」私たちの生活の在り方を問い直し、社会経済システムをデザインしなおすことを企図している。
- 13) 「逆転する植民現象」については、新原道信『境界領域への旅—岬からの社会学的探求』大月書店、2007年で論じた。「植民地化」と「労働力移送」の世界規模の運動は、同時に、絶えず“混交・混成・重合”してゆくクレオリザションをもたらした。このプロセスはいまや世界の各地にひろがってい

る。私たちがいま立ち会っているのは「逆転する植民現象」,「荒野」として「発見」されたものたちの反逆であり、阻止しようとしてもできない不可逆的現象である。これらはいずれも、コロンブスの「発見」以来の「植民地支配」という（人間によって創り出された不均衡な関係の重合性の）拘束によって、歴史を自らつくれなかった民（欠けたる存在）として自らを定義せざるを得なかった人々がもつ意味をとらえ直すものである。

- 14) 『地域社会学会会報』No. 200, 2017年1月15日号に寄せられた似田貝香門, 岩崎信彦, 矢澤澄子という前会長たちによる文章は, 「1.17」そして「3.11」という「出来事」によって, 顕わとなった“生身の現実 (cruda realtà, crude reality)” に対して, 最も真摯に自らの理論と方法を組み直してきた調査研究者たちの姿勢が示されている。『地域社会学講座』とともに編集した広田康生と浅野慎一は, それぞれ, 広田康生・藤原法子『トランスナショナル・コミュニティ形成とアイデンティティの都市社会学』ハーベスト社, 2016年; 浅野慎一・佟岩『中国残留日本人孤児の研究—ポスト・コロニアルの東アジアを生きる』御茶の水書房, 2016年という著作をまとめ, 新原は, 『うごきの場に居合わせる—公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』中央大学出版部, 2016年をまとめた。

地域社会学会では, 2014年5月より2016年5月まで, 研究委員長・浅野慎一のもとで, 「生命圏」 「生活圏」をめぐって, “生存の場としての地域社会の探究／探求 (Exploring Regions and Communities for Sustainable Ways of Being)” を行った。古城利明「3.11以後のリージョンとローカル—東アジア・日本を中心に」(2014年10月4日, 明治学院), 新原道信「生存の場としての地域社会の探究／探求」(2014年11月29日, 同志社大学), 鈴木鉄忠「『歴史的地域』の再構築—北アドリア海圏国境の市民文化活動を事例に」(2015年2月7日, 首都大学・秋葉原サテライトキャンパス) が, それぞれ依頼され基調報告を行い, 本研究チームの研究成果を開示し研究交流を行った。また年次大会においては, 大会シンポジウムでの基調報告を友澤悠季, コメンテーターを新原道信が行い(2015年5月10日, 東北学院大学), 阪口毅(2014年5月10日, 早稲田大学)と鈴木鉄忠(2015年5月9日, 東北学院大学)が大会自由報告を行っている。新原の報告においては, 「3.11以降」の日本社会を考えるなかで, 実は体験していた「チェルノブイリ以降」のイタリア社会について(1986年4月26日の「チェルノブイリ」/コルシカ南東部とサルデーニャ中北部の山間地での雨/1987年11月の国民投票とサッカーの知識人グループ/2000年代の「財政危機」と「地方自治体の廃棄」 「中高年/若者/牧夫・農民の廃棄」/「青舌病 (Bluetongue disease)」と2003年の原潜事故/2010年の牧夫・農民・学生運動/2011年「フクシマ」ショック/2011年5月のサルデーニャでの住民投票と6月の国民投票など), その場に居ながら, 何を見過ごしていたのかという観点からの“すくい(掬い/救い)とり, くみとる (scoop up/out, scavare, salvare, comprendere)” 試みについての報告を行った。この2014年11月の報告は, 『うごきの場に居合わせる』における「掘り起こし」 (“考故学 (Sociological (anthropological) caring for the lost)”) の試みへとつながっている。

- 15) “うごきの場に居合わせる (Being involved with the field, Il gioco relazionale nel campo di azione)” という〈エピステモロジー/メソドロジー/メソッズ/データ〉については, とりわけ新原道信「惑星社会のフィールドワークにむけてのリフレクシヴな調査研究」新原道信編『うごきの場に居合わせる—公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』中央大学出版部, 2016年, 33-82ページ, および新原道信「乱反射するリフレクション—実はそこに生まれつつあった創造力」新原道信編『うごきの場に居合わせる—公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』中央大学出版部, 2016年, 417-456ページのなかで考察した。
- 16) “未発の状態 (stato nascente, nascent state)” については, 新原道信「未発の状態/未発の社会運動」をとらえるために—3.11以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求 (2)』『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学25号 (通巻258号) 2015年で詳しく論じた。またこうした“兆し・兆候 (segni, signs)”をとらえる“心身/身心現象”に関する問題意識から, 『未発の「第二次関東大震災・朝鮮人

虐殺」の予見をめぐる調査研究』（科学研究費補助金基盤研究C調査報告書（研究代表者・新原道信）、2007年）という調査研究を行った。いささか奇異(?)なタイトルを持つ本調査研究は、10年ほどの間かかわってきた神奈川でのフィールドワークでの「出来事」から着想されたものである。その「出来事」とは、「人権」や「環境」や「国際」にかかわるボランティア活動をしている複数の「在日日本人」から、「○○のような人間は、もし大地震が起こったりしたら、関東大震災のときみたいに、きっと殺されてしまいますよ」という言葉が発せられたというものであった。どちらかといえば、「立派な市民」であり、「礼儀正しく親切な」部類に属し、悪く言うひとはほとんどいないそのひとたちの差別性・危険性を警戒しつつつけていたのは、“移動民の子供たち (children of immigrants)” だった。「第二次関東大震災」はこの報告書刊行の時点、そして2017年1月現在ではまだ起こっていない。しかし、この十数年で、「内なる国際化の主人公」から、いつのまにか「治安強化」の対象となっているという体験をしたひとびとから見て、彼らをとりまく「市民」（とりわけ「援助の手をさしのべてくれる」）と、その「市民」を正式な成員として成り立っている社会をどのように見ているのか、というのが、最も大きな関心事であった。

- 17) メルレルとメルッチの学問についての理解をまとめる必要性を感得し、メルレルについては、新原道信「A. メルレルの“社会文化的な鳥々”から世界をみる試み—境界領域の智”への社会学的探求(1)」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学27号（通巻268号）2017年、メルッチについては、新原道信「A. メルッチの“未発のリフレクション”—痛むひとの臨場・臨床の智と限界状況の想像／創造力」矢澤修次郎編『反省社会学の地平』東信堂（近刊予定）としてまとめた。メルレル、メルッチとの間で、“対話的にふりかえり交わる”、“旅をして、出会い、ともに考える”という“比較”のスタイルを練り上げていく途上で、対話者となってくれたのは、M. ジャコヴェ (Maria Giacobbe, コペンハーゲン在住のサルデーニャ人作家)、故・計良光範・智子さんご夫妻 (札幌・ヤイユーカラの森)、古城利明教授、東京大学の小野塚知二教授たちだった。他方で、サルデーニャ州知事となった経済学者 F. ビリアル、前知事の R. ソルから届くメール、トリエステ、ゴリツィア、トレント、ボルツァーノなど、肥沃な「地」のもとに行われる“交感／交換／交歓 (scambio, Verkehr)”もまた大きな要素となっている。その特徴は、①“地識人 (the wise on the street, i saggi della strada)”たちとのかかわりの“共創・共成”で練り上げられた“智へのかまえ”であること、②「生老病死」が刻み込まれていること（“低きより、高みから裁くのではなく、地上から、廃墟から”、社会の痛苦の体現者としての病者でもある社会の医者として）、③うごきのなかに在ることを常態とする“不協の多声 (polifonia disfonica)”である。それはまた、人間の“拘束／絆”からの「エピステモロジー／メソドロロジー／メソツズと価値言明 (epistemology/methodology/ methods and value statement of human bondage)」—“交感／交換／交歓 (scambio, Verkehr)” “友愛／共感・共苦・共歓 (compassione)” という方法論による生身の運動であり、複数の“固有の生の軌跡 (roots and route of the inner planet)”の「間」にあるもの、“関係性の動態 (the passage of relationship)”、“衝突・混交・混成・重合の歩み (percorso composito)”、“拘束／絆 (servitute humana/human bondage)”によって串刺しにされた“思行 (思い、志し、言葉にして、考えると同時に身体を動かしてみる営み)”、身体・意識・認識・実践の感覚として存在している。ひとつの“生物 (なまもの, cose crudi, causa cruda, corpi crudi)”であり、作物そのものでなく、作物が育つための土をたがやし、まず雑草 (クローバー) が育つところまで持っていくような、“有体 (corporeality)” “生体 (organismo vivente)” に拘束された“身実からの智慧 (saggezza corporale, the wise of living in composite corporeality)”である。
- 18) 1980年代から「3.11以降」に至る自らの“選択の盲目”(向き合うべき根源的なことがらに対して、「しばらくの間、やり過ぎ、先送りしてきたこと」)を痛感させられたのは、「3.11」という「ペリペティア (peripeteia)」であった。哲学者・真下信一は、G. ルカーチ (Georg Lukács) が「アリストテレス以来のドラマ作法の根本概念の一つ」である「ペリペティア」を取り上げ、「ヒトラーとい

う現象」を論じた文章（『運命の転回』）と対比するかたちで、日本人と日本社会が体験した「ペリペティア」について下記のように論じた（真下信一「思想者とファシズム」『真下信一著作集 第2巻』青木書店、1979年、165-167ページ）。

いかなる事実にも、いかなる出来事の新しさにも、あたかも絶縁体でしかないようなファナティズムを別とすれば、八・六と八・一五は日本のファシスト的戦争劇における最大のペリペティアであった。主人公たちの頭と心のなかで「無知から知への急転」がそこで生じねばならないはずの「認識の場」であり、ドラマの窮極の意味が「そうであったのか！」というかたちで了解されるべきラスト・シーンであった。もとギリシャ語のペリペティアは、ことに、悪しき状態への、人間の災禍への急変という意味をもつものであるが、八・六と八・一五のパニック、自己をも含めてこの国民の最大の災禍をかかえるものとして率直にみとめ、つづいて、「最後に」このような「結果としてあらわれ」たものが「客観的現実のなかですでにとっくに存在」していたことを承認し、この確認にもつづいてあの「本質」をたぐりだし、その「本質」への自己のかかわり合いを明らかにしようとする。このことが責任性の問題一般が生じうる必須の条件なのである。

「八・一五」をわれわれは見た。それは事柄の事実的経過のなかで「うわべのまやかし」が一枚一枚と剥ぎとられてゆくそのとどのつまりに、むき出しの「本質」としてあらがいがたく目前に横たわったものであった。それを各自が見たと思ったそのイメージを保ちながら、あの歴史的経過を逆にたどれば、数々の「うわべのまやかし」が、あたかもフィルムの逆回転のなかのように、一枚一枚と各自のもつ「本質」のイメージの上へ戻されてゆく。この後からの積み戻しのなかでは、新しく暴露された諸事実の知識が加えられつつ、ひとは事実的経過のなかにかつて巻き込まれていたときよりも、はるかに聡明にふるまうことができる。「本質」のイメージは多少とも見直され、この見直された「本質」観が、かつての自己に対置される。それゆえに、各人の自己批判、自己責任の追及の仕方は、「本質」のそれぞれの見直し方に相対的であるよりほかはない。

- 19) この立体的なりフレクシオン（「サルページ」）については、いくつかの試み（思想の冒険）を行ってきた。新原道信「A.メルッチの『時間のメタファー』と深層のヨーロッパ『フィールドワーク/デイリーワーク』による“社会学的探求”のために」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学21号（通巻238号）、2011年は、フィンランド南スオミ州の都市ラハティ（Lahti）からさらに、車で一時間ほど移動して、ヘイノラ（Heinola）をこえ東スオミ州の湖畔の港町ミッケリ（Mikkeli）の近くの針葉樹森と遠浅の湖が在る湖沼地帯にあるバンガローで、ノルウェーへの旅から帰ってきたミッケリ出身のフィンランド人の友人家族とともに過ごし、ヘルシンキからウイーンに飛んで、そこから「冷戦の時代には近くて遠かった」スロバキア共和国の首都ブラチスラヴァを経て、サルデーニャへと「帰還」するという“うごき”のなかで執筆している。

ここで行った“探究/探求の技法”は、新たに訪れた場所（この場合はフィンランドのミッケリ）で、すでに身体のなかに刻み込まれた感触を「想起」し、過去の体験や知見との意外なつながりを「連想」し、「対話」という“思行（思い、志し、言葉にして、考えると同時に身体を動かしてみるという投企）”である。“叙述・伝達の技法”としては、入り組んだ時間の流れと空間の広がりの中で「生起したことがら」の「衝突・混交・混成・重合」の「循環」に即した組み立てを選択している。ここでは、“うごき”のなかでふりかえったときに見い出される「循環」が、“叙述/伝達”すべきものとなっている。“探究/探求の技法”と“叙述・伝達の技法”の双方において、とりわけ参考となったのは、ドイツの著作家H.エンツェンスベルガー（Hans Magnus Enzensberger）の『嗚呼！ヨーロッパ 2006年に記されるエピローグと七つの国の知覚 *Ach Europa! Wahrnehmungen aus Sieben Ländern mit einem Epilog aus dem Jahre 2006*』という著作である（Hans Magnus Enzensberger, *Ach Europa! Wahrnehmungen aus Sieben Ländern mit einem Epilog aus dem Jahre 2006*, Frankfurt am Mein: Suhrkamp, 1987年 = 石黒英男他訳『ヨーロッパ半島』晶文社、1989年）。エンツェ

ンスベルガーは、この作品のなかで、スウェーデン、イタリア、ハンガリー、ポルトガル、ノルウェー、ポーランド、スペインという、「ヨーロッパの辺境」とみなされる土地を歩き、日常生活の中に脈打っている様々な「知覚 (Wahrnehmungen)」, すなわち“記憶”や“経験”として、沈殿し、折り重なっているところの「真実 (Wahr)」を受け取ろう (nehmen) とした。「ベルリンの壁の崩壊」から「ドイツ統一」へという「歴史の濁流」に目がうばわれがちな時期に、いわば、ヨーロッパの「他端／多端」から見ていくという“かまえ”を持つ著作であった。同書の最後には、「2006年に記されたエピソード」である「海ほとりのボヘミア」という「寓話」が最終章として付されている。アメリカの新聞記者ティモシー・テイラーが、「2006年にヨーロッパを視察して、それを雑誌『ザ・ニュー・ニュー Yorker』に発表した」という「架空の物語」は、同書が書かれた時期から20年後にあたるのが「2006年」であり、“過去において展望された未来”である2006年についての叙述を、メルッチの「時間のメタファー」の話と対比させつつ、2010年にふりかえったということになる（「円 (circle) もしくは循環 (cycle)」「矢 (arrow)」「点 (point)」という三つの「時間のメタファー」については、新原道信『「グローバリゼーション／ポスト・モダン」と『ブレイン・セルフ』を読む—A.メルッチが遺したものを再考するために』『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学第18号（通巻223号）、2008年」を参照されたい）。

この論稿以外にも、1994年にサルデーニャのサッサリで1988年以降の旅をふりかえるという試み（新原道信「“移動民”の都市社会学—“方法としての旅”をつらねて」奥田道大編『21世紀の都市社会学 第2巻 コミュニティとエスニシティ』勁草書房、1995年）、「ヨーロッパ統合」について、バルト海の島嶼社会オーランドでふりかえるという試み（新原道信「深層のヨーロッパ・願望のヨーロッパ—差異と混沌を生命とする対位法の“智”」永岑三千輝・廣田功編『ヨーロッパ統合の社会史』日本経済評論社、2004年）、「イストリア半島への“旅”のなかで、オーランド諸島をふりかえるという試み（新原道信「深層のアウトノミア—オーランド・アイデンティティと島の自治・自立」古城利明編『リージョンの時代と島の自治』中央大学出版部、2006年）などを行ってきている。

より多方向への立体的なりフレクシオン（“乱反射するリフレクシオン (dissonant reflection, riflessione disfonica)”と名付けた）の試みとしては、前出『境界領域への旅—岬からの社会学的探求』において、書物、映画、テレビ番組、手記、景観、言葉、表情、記憶などを「フィールド」として、日常的な行為のなかにある「内省」と「相互作用」によって生起する“メタモルフォーゼ”の“うごき”を“すくい（掬い／救い）とり、くみとる”ことを試みた（本橋哲也「書評『境界領域への旅—岬からの社会学的探求』 寡黙で鈍足、読者を不思議な味わいで魅了」『週間金曜日』686号、2008年を参照されたい）。また、新原道信『「湘南プロジェクト」の胎動—不協の多声のどよめき』『うごきの場に居合わせる—公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』中央大学出版部、2016年においては、“うごきの場”に居た調査者および周囲の人間の“心身／身心現象 (fenomeno dell'oscurità antropologica)”の“うごき”に即して、叙述を再構成、時間軸上は叙述が前後するかたちで構成した（同書「むすびにかえて」468-469ページにおける野宮大志郎の「そのまま時間が過去から現在に流れると想定しながら読み始めると、混乱の中に投げ出される。その章の中のある節で、2007年に始まったプロジェクトについて語られたかと思うと、次の節では、2015年時点での振り返りを述べた後、その節の説では、1999年の合宿研究会の話が述べられる」という記述を参照されたい）。

地域社会の「構造」のみならず“深層／深淵”の“うごき”を「理解」するという問題意識は、サルデーニャでの調査研究に先んじて行った、1985年から1987年にかけての沖縄・広島・長崎における平和運動・社会運動の調査において芽生えた。そこでは、地域社会の「構造」と「動態」を「理解」するためあらかじめ準備していた「分析枠組」ではどうしても捉えきれないことがらに直面した。そして当面はこの「了解」が困難な「淵」のごときものを、「堅い岩盤」という言葉で「粗描 (abozzare)」した。そしてまた、1985年以降の沖縄と、1987年以降のサルデーニャにおける地域調査と長期滞在

のなかで、個々人の意識や思想の背後にあるものをどう捉えればよいのかを模索し、ひとまず「文化的抵抗力 (resistenza culturale)」と名付け直した。さらに、1989年の「ベルリンの壁崩壊」から「ヨーロッパ統合」へのうねりをサルデーニャ滞在中に体感し、それ以降も、ヨーロッパの地域社会の「堅い岩盤」が、どのように「移行、変転、変化」していくのか、そしてまたいかなるかたちで「文化的抵抗力」を持ち続けていくのかについて、強い関心をもって調査研究をすすめてきた。次稿で詳しく考察したいが、秋月辰一郎、平良修、小林正直、宗像基たち宗教者の「予見的認識」の意味を“サルベージ”したいと考えている。

- 20) これまでの調査研究の軌跡については、新原道信『ホモ・モーベンスー旅する社会学』窓社、1997年、および、新原道信『旅をして、出会い、ともに考える—大学で初めてフィールドワークをするひとのために』中央大学出版部、2011年などで詳しく論じている。サルデーニャと沖縄の最初の比較研究に際して、依拠したのは、鶴見和子の解釈による南方熊楠の「地球志向の比較学」と共同研究『思想の冒険—社会と変化の新しいパラダイム』（鶴見和子・市井三郎編、筑摩書房、1974年）であった。“地域学 (Terranology, terranologia)”は、サルデーニャでのフィールドワークから練り上げられ、メルッチの惑星社会論、メルレルの島嶼社会論との融合により、“比較学”が再構成されていった。“うごきの場に居合わせる”は、“地域 (regione, region, area, zone, territory, field, element)”への入り方として、フィールドのなかで捻出されたものである。前出の『ホモ・モーベンス』は、地域学／比較学の形成篇であり、新原道信『境界領域への旅—岬からの社会学探求』大月書店、2007年は、地域学／比較学のまとめと応用篇、前出『“境界領域”のフィールドワーク』は、“地域学”とコミュニティ・スタディーズの並存・混交による共同研究、前出『うごきの場に居合わせる』は、日本でのコミュニティ・スタディーズのまとめであった。今後は、“比較学 (Comparatology)”と“惑星社会のフィールドワーク”に主眼をおいた調査研究のとりまとめへと移行していく予定である。
- 21) 2016年2月のサルデーニャ・ミラノ調査、3月の沖縄調査、8月のサルデーニャ調査、9月のトリエステ調査に続いて、2017年2月のサルデーニャ調査を行い、3月には、沖縄・長崎調査を予定している。この場では、下記の報告と討論により、長年かかわりのある研究者・市民との間での“対話的にふりかえり交わる (riflessione e riflessività)”調査をしている。
- Michinobu Niihara e Tetsutada Suzuki, *Terza Missione dell'Università e responsabilità della ricerca: Esperienze di formazione e ricerca con le comunità*, in Laboratorio FOIST per le Politiche Sociali e i Processi Formativi with EnRRICH - Enhancing Responsible Research and Innovation through Curricula in Higher Education, Dipartimento di Scienze Umanistiche e Sociali Università degli Studi di Sassari, Sassari, il 24 febbraio 2016.
 - Michinobu Niihara, *Coesione sociale e promozione della cittadinanza attiva. Ricerche a confronto nel contesto giapponese e in quello sardo ed europeo*, in Associazione IntHum - Laboratorio interculturale di ricerca e di promozione della condizione (H) umana, Sassari, il 8 agosto 2016.
 - Michinobu Niihara e Tetsutada Suzuki, *Ricerca sociale e impegno comunitario*, in FOIST per le Politiche Sociali e i Processi Formativi Laboratorio, Dipartimento di Scienze Umanistiche e Sociali -Università degli Studi di Sassari, Sassari, il 24 febbraio 2017.
 - Michinobu Niihara e Tetsutada Suzuki, *Disuguaglianze, senso civico, partecipazione. Come lavorare insieme. Le nostre esperienze e quelle giapponesi a confronto*, in Associazione IntHum - Laboratorio interculturale di ricerca e di promozione della condizione (H) umana e Comunità Attive e Promozione della Coesione Sociale, Sassari, il 24 febbraio 2017.
 - Michinobu Niihara e Tetsutada Suzuki, *Settimo incontro di comunità fra cittadini del quartiere di*

Santa Maria di Pisa, ricercatori e operatori sociali a seguito delle riunioni e delle “Camminate comunitarie” realizzate nel quartiere, in su: “CapacitAzione: comunità attive e promozione della coesione sociale” presso Uffici Comunali del Settore Coesione Sociale e Pari Opportunità, Sassari, il 27 febbraio 2017.